

キリシタン文献・ローマ字本の分かち書きについて

一 体言と助詞の関係から 一

千葉 軒士 (名古屋大学大学院)

要旨

キリシタン文献・ローマ字本で行われる分かち書きについて、土井(1971)は「天草版平家物語」の210丁前後を変更点として、それ以前は体言とそれに後置する助詞が分かれて表していたものを、続いて表すように変更していくことを指摘する。これを受けた従来の研究ではこの変更をキリシタンたちの日本語観察力の向上ととらえてきた。しかしキリシタン文献・ローマ字本全般に目を通すと体言と助詞を続けて記すという行為が徹底されているわけではない。また行頭と前行末の語とのつながりを示すー(hyphen)も、キリシタン文献全般で行頭の助詞と前行末の体言とをつなぐ例があり、体言と助詞の結びつきを一つのまとまりととらえる意識がキリシタン版作成の初期段階で既にあったことが想定される。「天草版平家物語」で見られた方針の変更は、日本語の観察が進んだ結果として変更したのではなく、体言と助詞の連結を一つにまとめて記すという既にあった認識を広く具現化しようとしたものであった可能性が考えられる。

1. はじめに

拙稿、千葉(2008)では日本の中世キリシタン文献・ローマ字本で用いられるsとその異体字のfの分布について、前者が主として語末で用いられ、後者が語頭・語中でのみ用いられていること、sとfの環境変異による二次的な機能として、sが語の切れ目を主に示し、fがこれ以後も語が継続することを積極的に示すという役割も担っていたという可能性を示した。

しかし、そもそもローマ字文献では語と語のあいだに空白を入れる分かち書きが行われ、語と語の切れ目が明確であるため、わざわざ各語についてsで語中・語末を、fで語頭を示す必要はない¹。この点、このsとfの環境に応じた分布はこの時代にヨーロッパの文献が記される際、sとfは書き分けるといふ慣習の残存、その影響のために、当該文献でも表れたものであろう。ただこのヨーロッパの文献で行われていた語の分かち書きを前提として、日本語を表記する場合、日本語で何を語と捉えるのか、あるいは日本語を記す際に何を基準として空白を入れるのか、ということが問題になったと思われる。またキリシタン・ローマ字文献の読み手が外国人の日本語学習者であったのなら、この学習者が日本語を認識しようとする際に手に取った書籍で示された分け方が語学学習に大いに寄与したことも十分に考えることである。キリシタン・ローマ字文献の分かち書きがどのように行われていたのか。これを観察することは、キリシタンたちが日本語を学習する際の日本語の語認識・語の把握を復元することにつながるであろう。本稿では、そのような問題意識から体言とその体言に後置する助詞の分かち書きの方針についての考察を行う。

¹ 『日本語文法大辞典』(松村明・明治書院(1971))では分かち書きについて、「同一字種の文字(かな、またはローマ字)で文章を書く際に、語句にまとまりを与え、読みやすくするために、文をくぎって離し書きにすること」とある。(p.925)

2. 先行研究

2.1 土井(1971)

キリシタン文献・ローマ字本の分かち書きについて、土井(1971)に以下の記述がある。

改善の方策が立てば、編纂の中途にあつても直ちに実行に移したけれども、その方法を前に遡らせて初めからやり直すといふことはしなかつたやうである。その例を一つ加へると、イエズス会で日本語を写すのに用ゐたローマ字綴で、体言につく助詞の「が」「の」「に」「を」「は」などを、初めには体言から離して書き、後には続けて書くやうになつたが、その変わり目が一五九二年(文禄元年)天草版「平家物語」の途中にあるのである。その書は「平家物語」「伊曾保物語」「金句集」の三書が合綴されてゐて、「平家物語」の扉紙とその本文の巻一までは古い書き方により、巻三の終りあたりの二〇ページ前後から新しい書き方によつてゐる。(pp.56-57)

とある。土井は体言につく助詞の「が」「の」「に」「を」「は」に注目し、体言と離して用いられていた助詞が、「天草版平家物語」の途中で記し方が変更されたことを指摘する。

これを実際の影印で一見すると、たしかに210丁前後では多く体言と助詞は続けて記されているが、それよりも前の部分では、体言と助詞が多く切り離されていることが確認できる。

2.2 鈴木(1988)

また、この「天草版平家物語」の傾向とそれ以前に作成された「ヒイデスの導師」(1592)での傾向について論じた鈴木(1988)では、以下のように記す。

最初イエズス会がなぜこれらの助詞を切り離して書いていたかを想像するに、おそらく機能的にロマンス語の前置詞に近いと考え、一語扱いということで体言と切離して明確化したのであろう。(中略)が、そのうちに日本語に対する観察が進み、日本語の膠着語としての性質に気づくようになって、これらの格助詞を体言と続けて記す方が、日本語として(読む場合、話す場合に)実際のであり、スマートであるとして続けるようになったのであろう。(p.120)

「ヒイデスの導師」と「天草版平家物語」の前半部で体言とそれに続く助詞が切り離されたことを、その内部だけでの変更でなく、イエズス会の日本語表記の経年的発達ととらえている。この体言とそれに続く助詞の表し方に大きな違いが見られるのは、ここで記すように日本語を膠着語と理解する判断がなされたためであろうか。この点は3節で確認する。

2.3 根岸(2007)とその問題点

ここまでにあげた分かち書きについての研究を踏まえ、根岸(2007)ではキリシタン版での分かち書きについて「初期の頃は、自国のポルトガル語の文法を日本語にあてはめてとらえ、助詞などを一語に扱い、体言と離して綴ったが、日本語研究が進むにしたがい、日本語の‘膠着語’の性質に気づき、助詞を体言に接続する方式に変更した」とし、鈴木同様の「日本語研究が進むほど必然的に、体言と助詞を離さずにまとめて表記する方式になったはずである」との

見解を示した。そして「天草版平家物語」の「～を以て」の表れるパターンについて考察し、「uo motte」に比べ「vomotte」が表れやすい形であることを確認し、これを用いる際の傾向について以下のように述べる。

「を以て」の実際の例から見ると、はじめは文法的な学習も意識されてか、語を細かく区切って（単語単位にして）あらわしていた（uo motte）。しかし、実際に日本人が話をするときは、「をもって」と一続きにすることから、分かち書きもそのとおりの単位に変えていった（vomotte）。また、会話において、「～／をもって」と間をあけることは少なく、前の語から続けて一気に用いるという実際から、分かち書きの単位もそれに即していった（vomotte）。(p.79)

根岸の言う「はじめ」というのがどの時点を指すのかは定かでないが、たしかにキリシタン文献・ローマ字本では「vomotte」という形は用いられる。

しかし、「分かち書きの単位もそれに即した」と言うものの「天草版平家物語」以外の文献に目を通すと、そのとおりではない。

以下の表1でキリシタン・ローマ字版本諸本での「～を以て」の表れ方とその数を示す。

・表1 「を以て」の表記のされ方

	uomotte	(空)vomotte	uo motte	(空)vo motte
サントスのご作業(1591)	2	318	12	29
ヒイデスの導師(1592)	1	814	0	1
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	59	5	11
天草版平家物語(1592)	6	22	5	0
伊曾保物語(1592)	16	12	0	0
金句集(1593)	15	8	0	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	0	5	333	22
ドチリナ・キリシタン(1600)	1	0	108	2
スピリツアル修行(1607)	2	4	593	36

* (空)は「～を以て」の前にスペースがあることを示す。

表1を見ると「を以て」の表記は「サントスのご作業」から「金句集」では「vomotte」を中心とした分けない「を以て」が主に使用され、「コンテムツス・ムンヂ」から「スピリツアル修行」では「を」と「以て」の間に空白のある「uo motte」が主に使用される。「コンテムツス・ムンヂ」から「スピリツアル修行」の「uo motte」の例は根岸の指摘する「「～／をもって」と間をあけることは少なく、前の語から続けて一気に用いるという実際から、分かち書きの単位もそれに即していった」という記述とは全く異なるものである。この検討からキリシタン文献のただ一作品だけを取り上げて、分かち書きの方針を一般化することには問題があることがわかる。キリシタン版の分かち書きとはいってもただ一つの書物を取り上げるだけでは、キリシタンたちが日本語をどのように理解しようとしていたかについて言及することは出来

ない。キリシタンの分かち書きの方針を考えるには、キリシタン版としてどのように分かち書きがなされていたか、その全体像を見なければならぬ。本論では、キリシタン版全体として行われた分かち書きの方針について、体言とそれに後置する助詞の関係を精査することで、考察を深める。

3. 「天草版平家物語」の「が」「の」「に」「を」「は」の分かち書き

ここでキリシタン文献全体での分かち書きについて考えるために先ほどあげた土井（1971）で指摘された助詞を「離す」や「続ける」といった所作が実際に行われたのかを確認してみる。そこでまず土井で指摘された「天草版平家物語」の210丁を基準として前半部（3丁から209丁）と後半部（210丁から408丁）で助詞「が」「の」「に」「を」「は」はどのように使い分けされているのかを詳細に見る²。以下に1592年に作成された「天草版平家物語」で「が」「の」「に」「を」「は」が前接する体言と離されて表れるのか、続けて表れるのかを数えた。以下の表2で示す。

・表2 「天草版平家物語」210丁の前後で「が」「の」「に」「を」「は」はどのように表れるか

	が	(空)が	の	(空)の	に	(空)に
天草版平家物語 3-209丁	122	458	970	2056	609	1407
天草版平家物語 210-408丁	439	27	2395	170	1718	97
	を	(空)を	は	(空)は		
天草版平家物語 3-209丁	169	1687	394	955		
天草版平家物語 210-408丁	1449	101	1098	62		

³ * 「(空) 助詞」は助詞の前にスペースがあることを示す

表2を見ると、「天草版平家物語」前半部ではここで取り上げた5つの助詞が直前の体言と多く離されて表れる傾向があるのに対し、後半部では逆に直前の体言と多くは続けて表れるという傾向が確認できる。たしかに土井の指摘の通り「天草版平家物語」では、210丁より後ろで「が」「の」「に」「を」「は」の助詞の多くを、直前の体言と続けて表すようではある。ただ体言と助詞を続けて記すように変換したともみてとれるが、なぜこの編者はここで取り上げた全ての助詞を体言と切り離さずに用いるよう徹底しなかったのだろうか。この表2で見ることが出来る傾向は、先行研究が指摘するように「天草版平家物語」前半部では多くの助詞が体言と離されて用いられていたものが、後半部では多くの助詞が体言と続けて用いられるようになったということである。

4. 「天草版平家物語」の方針変更点

前節で「天草版平家物語」で体言とそれに後置する助詞を離して表していたものを、続けて表わすようになっていく傾向は確認した。では、その変更点は見出せるか。本節では、それを

² 「大文典」でジョアン・ロドリゲスは「が」「の」「に」「を」「は」について、格助辞として扱う。

³ 本論における調査では、タイトル用の大きめのフォントで表れる助詞、行頭に表れる助詞は数えない。

確認する。そのために前節で確認した「が」「の」「に」「を」「は」の助詞がどのように表れるか、210丁前後の丁を1丁ずつ見ていく。以下の表3で示す。

・表3 「天草版平家物語」210丁前後、各丁での体言とそれに後置する助詞の表れ方

	(空)が	が	(空)の	の	(空)に	に	(空)を	を	(空)は	は
204丁	3	0	15	0	8	1	10	0	4	1
205丁	0	0	13	0	7	0	11	0	5	0
206丁	10	0	8	0	9	1	6	0	6	0
207丁	1	2	2	6	2	4	2	10	0	6
208丁	0	2	4	2	0	5	2	3	1	6
209丁	0	0	8	2	3	3	5	8	0	3
210丁	0	1	0	9	3	5	2	4	2	3
211丁	1	3	2	11	4	3	2	8	1	1
212丁	0	3	3	5	2	6	9	8	0	3

* 「(空)助詞」は助詞の前にスペースがあることを示す。

表3から206丁までは5つの助詞が多く直前の体言と離されて表れるのに対し、207丁以後では逆に直前の体言と多くは続けて表されるようになる。ここから土井の指摘した210丁前後での「新しい書き方」の採用は、207丁から行われた可能性が考えられる。

この207丁の下部には本文とは関係なくOという文字がある。キリシタン版は8枚同時に印刷され、その際に判別のためにマークを付す。ここではこのOという文字が同時に刷られたものを示すマークとして用いられた。この同時に刷られたOが付される丁は207丁から214丁の8枚である。どうやらこの新しい書き方はこの8枚を印刷するときから適用された方針であるようだ。

土井が指摘した210丁前後の新しい書き方への変更は207丁から行われたであろうことは確認した。しかし、各丁を詳細に見てもなお全ての体言と助詞を切り離さずに表すという方針が徹底されていないことがわかる。では、「天草版平家物語」が作成される前後の作品でどのような方針でこの体言と助詞が表れるのか、次節で確認していく。

5. 「天草版平家物語」以前と以後のキリシタン文献・ローマ字本での傾向

「天草版平家物語」の207丁以後で変更したと見られる多くの体言とそれに後置する助詞とを続けて表すという方針は、土井の指摘の通りキリシタン文献ローマ字本の「天草版平家物語」の途中からそれ以降の作品にも適用されたのだろうか。そこで、「天草版平家物語」が作成される以前からあった本と、それ以後に作成された本についても同様の調査をし、その対象とした個々の本全体でどのように表記されているのかを確認した。以下の表4で示す。

・表4 キリシタン・ローマ字版本諸本で「が」「の」「に」「を」「は」はどのように表れるか

	が	(空)が	の	(空)の	に	(空)に
サントスのご作業(1591)	156	246	4096	6099	1779	4453
ヒイデスの導師(1592)	217	142	3424	7723	1170	4380
ドチリナ・キリシタン(1592)	67	29	436	1032	184	645
伊曾保物語(1592)	231	23	1293	66	950	46
金句集(1593)	104	2	391	16	390	10
コンテムツス・ムンヂ(1596)	233	44	4070	265	3742	225
ドチリナ・キリシタン(1600)	96	6	1608	103	955	44
スピリツアル修行(1607)	753	53	9762	663	6058	663
	を	(空)を	は	(空)は		
サントスのご作業(1591)	4	6156	600	1776		
ヒイデスの導師(1592)	204	5256	602	2692		
ドチリナ・キリシタン(1592)	18	761	130	238		
伊曾保物語(1592)	1008	46	526	30		
金句集(1593)	485	24	327	16		
コンテムツス・ムンヂ(1596)	3560	192	1932	98		
ドチリナ・キリシタン(1600)	966	56	619	24		
スピリツアル修行(1607)	6844	497	2965	157		

* 「(空)助詞」は助詞の前にスペースがあることを示す。

表4を見ると、「天草版平家物語」以前に作成された「サントスのご作業」「ヒイデスの導師」「ドチリナ・キリシタン」(1592)で見られる体言とそれに後置する助詞の関係は3節で見た「天草版平家物語」の前半部と同じように、多くを助詞と離して表わされる。もちろん「ヒイデスの導師」「ドチリナ・キリシタン」(1592)の「が」のみ助詞と分かれずに表されたものが多く用いられているが、大半は「天草版平家物語」前半部と同様に助詞とその直前の体言を離して表されている。それに対し、「天草版平家物語」以後に作成された5作品では、「天草版平家物語」の後半部と同様に体言とそれに後置する助詞を多くは続けて表わしていることがわかる。とすると、土井の指摘の通りにこの5つの助詞に関しては「天草版平家物語」の207丁以後で行われた表記方針の変更を受け継いだとみることができる。

しかし、この作品群においても全ての体言と助詞を切り離さずに表すという方針が徹底されていないことが確認できる。もし鈴木の言う「日本語の観察が進み」や、また根岸の言う「日本語研究が進む」といった判断で分かち書きの方針を変えたのであるならば、「天草版平家物語」以後の版本諸本で体言と助詞は切り離さずに表すという方針がさらに徹底されていてもおかしくないのではないかと。しかし実際は表記の方針が変更されつつもそれが徹底されることはなかった。なぜこのようになったのかを考察する材料として、次節で－(hyphen)の表れ方と合わせて考察していく。

6. - (hyphen) について

キリシタン文献ローマ字本では- (hyphen) が用いられる。- は一つの単語を2行に分けて書くとき、前の行の最後に置かれ、語が継続することを示す際に用いる。ただこの- は必ず用いられるものではなく、その使用は義務的なものではない。以下の影印で確認しよう。

**uo icafodo no coto zo to funbet lu hexi. Sono yuye
ua cono curuximi uo nogaxi tamauan tameni , go**

「ヒイデスの導師」490丁 17,18行目

**canben xiraqu vomoixi mono nari. Sono yuye-
ua cono qiuame ua fito no tameni dai ichi no curai**

「ヒイデスの導師」511丁 15,16行目

「ヒイデスの導師」490丁の影印では行末にある「yuye」に- が付されず、次行の「ua(は)」に続くのに対し、511丁の影印では「yuye」に- が付され、次行の「ua」に続く。分けるという行為が語の境界を示すのに対して、- はその前後がつながり、語の境界がこの切れ目がないことを示すものである。体言の末尾に- が付され、後の行に「は」が置かれている511丁の例を見ると、この例では「yuyeuua」を一つのまとまりであることを示そうとしていたことがわかる。これは先ほどの体言と助詞を続けて表すことで一つのまとまりとした所作に似ている。とするならば「天草版平家物語」の作成途中に体言と助詞を続けて表すという日本語を記す方針を変更した際に、この- も体言と後置する助詞とを結ぶ例が多く確認できるのではないかと仮定してみる。土井の指摘した助詞を「離す」から「続ける」という「新しい書き方」が採用されたのならば、- も同様に何らかの役割の変化をしたのかを確認してみよう。行頭で用いられる助詞に対してその前行の最後の体言に- はどれだけ付されるのだろうか。「が」「の」「に」「を」「は」の5つの助詞について精査した。以下の表5で示す。

・表5 行頭で助詞が用いられる際の前行の行末で- が用いられるか、否か

	- が	が	- の	の	- に	に
サントスのご作業(1591)	5	22	8	490	5	259
ヒイデスの導師(1592)	6	16	3	475	11	287
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	3	1	62	0	48
天草版平家物語 3-207丁	0	28	1	134	2	92
天草版平家物語 208-408丁	2	20	24	81	9	61
伊曾保物語(1592)	2	14	3	1	3	35
金句集(1593)	1	1	0	10	1	7
コンテムツス・ムンヂ(1596)	2	8	10	189	18	184
ドチリナ・キリシタン(1600)	1	1	4	35	5	16
スピリツアル修行(1607)	23	7	272	107	201	84

	一 を	を	一 は	は
サントスのご作業(1591)	7	349	4	105
ヒイデスの導師(1592)	2	354	4	173
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	48	1	19
天草版平家物語 3-206 丁	2	74	0	59
天草版平家物語 207-408 丁	10	57	10	32
伊曾保物語(1592)	7	30	5	22
金句集(1593)	4	14	3	5
コンテムツス・ムンヂ(1596)	3	174	10	64
ドチリナ・キリシタン(1600)	6	34	3	10
スピリツアル修行(1607)	368	107	88	33

※ 「一 助詞」は行頭にある助詞の前行末にある体言に一が付されることを示す。

表5でまず「天草版平家物語」を見よう。「天草版平家物語」前半部では、前の行の語末に一が付されることは少ない。それに比べ「天草版平家物語」の後半部では一が付される例がやや多く見られる。また「天草版平家物語」以後の作品群についても一は用いられる。さらに「スピリツアル修行」に至っては、一を付さない例よりも一を付す例が多く見られる⁴。しかし「天草版平家物語」前半部で少数用いられた一はそれ以前の作品でも使用されていることが確認できる。とすると、この「天草版平家物語」以前の版本の製作者も、体言と助詞の結びつきを一つのまとまりとみなしていた可能性が伺われる。表5を通して考えるならば、キリシタン版諸本を通して行頭の助詞の前行末にある体言との連結を示すために一を付すという行為により、それを一つのまとまりとして示すという考えがキリシタン版作成の初期段階で既にあったと考えることも可能であろう。

7. 方針の変更

ここで今までの考察を整理しよう。体言と助詞との分かち書きについて、キリシタン文献・ローマ字本では体言と助詞を切り離すか、或いは続けるか、といったどちらかに傾斜する偏りはみられたが、どちらの方法も併用されていたことを確認した。また一についてもキリシタン版作成の初期段階から体言と助詞を一つのまとまりとしてみなす考えがあったことも確認した。

この二つの点がキリシタン文献・ローマ字本全体で確認されることから、従来の研究で日本語の観察が進むにつれて行われたとされた「天草版平家物語」の207丁以降での体言と助詞を続けて記す方針への転換は、それ以前のキリシタン版が製作される初期段階から知られていた見解をこの変更点で多くに適用していったと考えることが可能であろう。従来の研究では時間軸の進行に伴い、日本語を母語としないキリシタンたちの日本語の観察力が増し体言と助詞を続けて記すようになったと考えられてきた。しかし、実際はキリシタン文献・ローマ字本の製作初期段階で、日本語の助詞をそれに前接する体言と分けずに一つにまとめて表すという

⁴ 「スピリツアル修行」でのみ一が多用されることについては、この本についてさらに検討する必要があるだろう。今後の課題である。

認識はあったものと考えられる。この認識を実際に広く具現化しようとして特に分ち書きのスペースをとりはらう方法を用い援用されたのが「天草版平家物語」の207丁以後だったのではないか。そしてこの具現化が徹底されなかったということは、そもそも体言と助詞を表す際にそれを分けるか、分けないかは、どちらでもよいという緩い縛りを基準としていたのではないか。このように考えることは「天草版平家物語」内で起きた表記の方針の変更そのものを否定するものではない。ただそれは未知から既知へという変更ではなく、既知の情報をなるべく具現化しようという方針の変更だったのではないか。ではなぜ体言と助詞を「離す」から「続ける」に変更したのか。それは体言と助詞を離さずに記すことがこのテキストでは望ましい、とこのテキストを利用する集団の判断が働いたためではないか。このように解したうえで日本語を膠着語として捉えた、などの論は展開されるべきである。

この本稿で試みた分ち書きの方針の変更の考察は、キリシタン文献・ローマ字本の作成経過に新たな見方を与えるものである。従来は、キリシタンの日本語観察力が増すにつれ、その認識が即反映されたという理解がなされてきた。しかし、もう一つの見方としてキリシタン版を作成する段階でキリシタンたちは既にそれ相応の日本語の観察力が備わっていたと考えることも可能であろう。従来認識が生まれたのは、キリシタンたちが日本語の母語話者でないために、様々な日本語と接することで多くの知見を得たと考えたためであろう。もちろん、このように観察を増したことで反映させた成果が存在する可能性は否定できない。しかし、それだけでも全てが説明できるわけではないということである。文献に表れる変化を全て新しい知見の反映とみるのではなく、版本を刷り上げるという段階にあっては、既に日本語に対して多くの知見を備えていたとみることも可能であろう。

8. まとめ

本稿では以下のことを確認した。

- ・キリシタン文献・ローマ字版本で見られる分ち書きは「が」「の」「に」「を」「は」の5つの助詞について「天草版平家物語」の207丁を変更点として直前の体言と離さずに記すようになる。しかし、その変更の方針は徹底されたものではなかった。
- ・一はキリシタン文献・ローマ字版本で行頭と前行末の語とのつながりを示すために用いられる。この一が、行頭の助詞と前行末の助詞をつなぐ例をキリシタン文献・ローマ字本の全てで確認できる。このことから、体言と助詞の結びつきを一つのまとまりととらえる意識がキリシタン版作成の初期段階で既にあったことが想定される。
- ・キリシタン文献・ローマ字本の体言と助詞の分ち書きと、一の用いられ方を考慮に入れると、「天草版平家物語」の207丁以後で見られた方針の変更は、日本語の観察が進んだ結果として変更したものではなく、体言と助詞を一つにまとめて記すという既にあった認識を広く具現化しようとしたものであった可能性が考えられる。

今後、さらに体言と助詞以外の分ち書きを検討していくことで、キリシタンたちが当時の日本語をどのように捉えていたのかを考える契機になると考えている。また版面の問題や、写本ではどのように分けたのかなど、分ち書きについて様々な視点からの考察を行うことも必要となるだろう。今後の課題である。

[引用および参考文献]

市井外喜子・根岸亜紀(2007)『天草版平家物語研究』おうふう

鈴木博(1988)『室町時代語の研究』清文堂

千葉軒士(2008)「キリシタン・ローマ字文献における s とその異体字について」名古屋言語研究第2号

土井忠生(1971)『吉利支丹語学の研究・新版』三省堂

※使用テキストは、各種複製本によった。